

現代文問題集③

【記述式問題特化篇】

目次

【第一問】	テクノロジーと記憶―忘却の力をめぐって	… 2ページ
【第二問】	土管の奥へ	… 10ページ
【第三問】	許すということ―医療の現場から考える	… 22ページ
【第四問】	光の遅さについて	… 32ページ
【第五問】	受け入れること―境界のない理解へ	… 43ページ
おわりに	…	54ページ

【第一問】テクノロジーと記憶 — 忘却の力をめぐって

私たちの日常は、いつの間にかスマートフォンやクラウドと切り離せないものになった。今日の予定はカレンダーアプリに登録し、買い物リストはメモ機能に入力する。旅行に出かければ、数百枚もの写真を撮影してクラウドに保存し、SNSに投稿する。忘れてとしても検索すればすぐに取り出せる。こうした環境の中で、私たちは「覚えておかなくてもよい」状況を生きている。だが、これは本当に幸福な変化なのだろうか。

人間が「記憶する」という営みには、情報を単に残す以上の意味がある。たとえば卒業式の写真をクラウドに保存していたとしても、その場で感じた緊張や、友人と笑い合った声、空気の匂いまでは保存できない。データとしての「記録」は劣化しにくい、それはあくまで外部化された情報であり、体験と感情を伴った「記憶」とは異なる。記憶は出来事を再生するだけではなく、それを解釈し直し、自分の物語に組み込んでいく営みなのだ。

人類の歴史を振り返れば、記録の技術は常に進歩してきた。文字の発明は言葉を音声から解き放ち、粘土板やパピルスに刻みつけられた情報は時空を超えて伝わった。紙と印刷術の普及は記録を爆発的に拡大させ、やがて写真や映像が現実の一瞬を保存できるようになった。そのたびに、人は「覚える負担」から解放されてきた。しかし同時に、「何を忘れるか」を自分で選び取る力が、記憶の本質を支えていたことも忘れてはならない。

忘却は、単なる欠陥ではない。心理学者エビングハウスが示した「忘却曲線」は、人間が時間とともに記憶を失っていくことを示すが、これは生存に不可欠な機能でもある。すべてを覚えていたら、私たちは過去に押しつぶされるだろう。忘れることで、私たちは経験を取捨選択し、大切なものに光を当て、そうでないものを背景へと退かせる。失敗の記憶が和らぎ、やがて「あの時の苦しみがあったから今がある」と振り返れるのも、忘却が経験を熟成させるからである。

しかし現代のテクノロジーは、この忘却のプロセスを大きく変えてしまった。SNSのタイムラインを遡れば、十年前の発言が一瞬で呼び出される。クラウドには削除しない限り大量の写真や動画が溜まり続ける。検索すれば、かつてのメールやチャットが瞬時に再生される。こうした環境では、過去は「忘れられる」どころか、むしろ現在に呼び戻され続ける。忘却によって経験を熟成させる余地は狭まり、むしろ「情報の渋滞」が私たちの心を塞いでしまう。

もちろん、テクノロジーが記憶に寄与する側面もある。病や加齢によって記憶が衰える人にとって、外部の記録は生活を支える補助具となる。認知症患者が日々の行動を写真に残すことで、自分の生活を再構成できるようになる例も報告されている。また、膨大なデータが容易に検索できるようになったことで、人類全体の知の共有は飛躍的に広がった。科学や歴史の研究は、まさに「忘れないこと」の上に成り立っている。便利さや可能性を否定することはできない。

だが問題は、「記録が豊かになるほど、記憶が薄れる」という逆説にある。外部に保存した情報は安心を与える代わりに、「覚えておこう」という主体的な努力を弱める。道を覚える代わりに地図アプリに頼る。誕生日を記憶する代わりに通知機能に任せる。漢字の書き順を覚える代わりに予測変換を使う。そこに積み重ねられているのは、便利さと引き換えにした「記憶する力」の縮小である。

さらに、「忘れられない社会」が生む問題もある。SNSで過去の発言が掘り返され、十年前の失言が現在の評価を左右する。検索エンジンに残された情報が「消えない過去」として当事者を苦しめる。忘却という人間固有の営みが働かないとき、社会は過去に縛られ、赦しや再出発の余地を失う。ここには、記録の技術がもたらす倫理的な課題も含まれている。

では、私たちはどうすべきなのだろうか。ここで大切なのは、「記録」と「記憶」を対立的に捉えるのではなく、補い合うものとして考えることだ。記録は情報の確実性や共有可能性を担保する。一方、記憶は忘却と変容を経ながら、私たちの人格や価値観を形づくる。どちらか一方だけでは不完全である。

たとえば旅をするとき、私たちはつい写真に夢中になる。しかし、写真ばかり撮ってその場の空気を味わえなくなるのは本末転倒だろう。むしろ、数枚だけ写真を残し、あとは五感に委ねるほうが、記憶は豊かに残る。あるいは、予定をアプリに入力した後で、それを手帳に自分の言葉で書き写すだけでも、情報は「記録」から「記憶」へと変わっていく。記録を入口に、記憶へとつなげる工夫が求められるのだ。

また、文化的に見れば、日本の古典文学は「忘却」と「記憶」のあわいを繊細に描いてきた。和歌には「忘れ草」「思ひ出」といった言葉が頻出し、忘れることの悲しみと、忘れられない痛みの方が詠まれている。西洋哲学においても、ベルクソンは「持続」としての時間を論じ、記憶を単なる再現ではなく、現在と未来をつなぐ創造的営みとして捉えた。人間の文化は、記憶と忘却のリズムの中で育まれてきたのである。

AI時代においても、この問題は一層深刻になるだろう。AIは膨大なデータを保持し、忘れることなく蓄積し続ける。しかし、人間は「忘れる」ことによって初めて、意味を見出し、新しい価値を創造する。AIと共存する時代だからこそ、人間が忘却の力をどう活かすかが問われる。

結局のところ、私たちが問うべきなのは「どれだけ記録できるか」ではない。「どのように記憶し、何を忘れるか」である。記録と記憶、保存と忘却。その間を往復しながら、私たちは初めて自分の時間を生きることができないのだろうか。

設問

問一（40字程度）

本文では「記録」と「記憶」の違いが論じられている。筆者の考えを踏まえ、この二つの違いを簡潔に説明せよ。

問二（40字程度）

筆者は「忘却は欠陥ではなく生存に不可欠な機能である」という趣旨を述べている。本文を踏まえ、この主張の意味を説明せよ。

問三（60字程度）

本文は、テクノロジーの発展によって「忘れられない社会」が生じる危うさを論じている。その危うさを本文の具体的内容に即して説明せよ。

問四（60字程度）

筆者は「記録が豊かになるほど記憶が薄れる」という逆説を提示している。この逆説の意味と、その背後にある人間の行動の変化を説明せよ。

問五（90字程度）

本文後半では「記録と記憶は対立ではなく補完である」と述べられている。この主張を本文の具体例を用いながら説明し、なぜ補完的に捉えることが必要なのかを論ぜよ。

問六（130字程度）

本文は「どのように記憶し、何を忘れるか」が人間にとって重要だと結論づけている。この考えを本文全体の流れに即してまとめ、自分なりの言葉で説明せよ。

【解答・解説】

問一

模範解答

記録は外部に保存される情報であり、記憶は体験や感情と結びついて意味を持つ営みである。

別解例一

記録は劣化しない外部情報で、記憶は忘却や変容を通じて人の心や価値観を形づくるもの。

別解例二

記録は共有可能な情報の蓄積であり、記憶は主体が経験を解釈し直して内面化する働きである。

チェックリスト

- ・ 記録Ⅱ外部／情報、記憶Ⅱ内面／体験の区別を示したか
- ・ 対比が明確になっているか

問二

模範解答

忘却は経験を取捨選択させ、大切なものを残し、苦痛を和らげて意味を生み出す心の営みである。

別解例一

忘却は過去の情報を整理し、時間とともに解釈を変えることで、人に新たな視点や成長を与える。

別解例二

忘却はただ失うのではなく、記憶を熟成させ、経験を人生の物語として再構成させる力を持つ。

チェックリスト

- ・ 忘却⇨単なる欠落ではなく、整理・熟成の価値を示したか
- ・ 人格や価値観の形成という趣旨を生かしているか

問三

模範解答

SNSや検索で過去の発言や情報が容易に掘り返され、失言や失敗が赦されず、再発の余地を奪う社会になる危うさである。

別解例 1

大量のデータが永久に残ること、忘却による心の熟成や赦し働かず、人間が過去に縛られる危険が生じる。

別解例 2

記録が消えず残り続けるため、人が成長や変化しても古い過去が評価を左右し、自由を損なう危険がある。

チェックリスト

- ・ 本文にある「過去の発言」「赦しの喪失」を踏まえたか
- ・ 危うさを具体的に説明できたか

問四

模範解答

外部に情報を残す安心感が、道や誕生日を覚える努力を弱めるように、記録の充実が主体的な記憶の働きを縮小させるという逆説を指す。

別解例 1

地図や通知機能に頼ることで、人が自ら覚える行為を放棄し、結果的に記録が豊かになるほど記憶力が衰える矛盾を示す逆説である。

別解例 2

外部化された情報が便利さを与える一方で、覚える必要性を失わせ、記憶を薄れさ

せるといふ現代的な人間行動の変化を指摘した逆説である。

チェックリスト

- ・ 「逆説の意味」を具体例つきで説明したか
- ・ 人間行動の変化（努力の縮小）を明記したか

問五

模範解答

記録は情報を正確に残し共有させ、記憶は忘却や変容を経て人格を形づくる。旅で写真を撮るだけでなく体験を味わうように、両者を補完的に捉えることで、人間らしい学びや成長が可能になる。

別解例一

記録は検索可能性や保存性を担い、記憶は体験や感情を内面化する。予定をアプリに入れ手帳に書き直す例のように、両者を補い合うことで情報は意味を持ち、豊かな人生形成につながる。

別解例二

記録は外部保存により確実さをもたらし、記憶は選択と忘却を通じて意味を更新する。片方に依存すれば不完全であり、両者を補完させることで人間固有の価値観や成長が維持される。

チェックリスト

- ・ 記録の長所／記憶の長所を具体的に挙げたか
- ・ 本文の例（旅行・手帳など）に触れたか
- ・ 補完の必要性を明確にしたか

問六

模範解答

テクノロジーの発展で記録は豊かになったが、忘却の働きが損なわれれば意味を創

造する力が衰える。記録と記憶を補い合わせ、残すべきものと忘れるべきものを選び取ることが、人間が過去に縛られず新しい価値を生み出し続けるために必要であると本文は結論づけている。

別解例1

外部に保存された記録は確かさを与えるが、人間の記憶は忘却と変容を通して初めて意味を持つ。本文は、すべてを残す社会が危うさを抱えることを示しつつ、記録と記憶の往復の中でこそ人間らしい時間を生きられると結論する。したがって、記録と忘却の選び方が決定的に重要になる。

別解例2

記録が増えるほど記憶が薄れる逆説を踏まえ、本文は忘却の価値を強調する。記録は保存を、記憶は創造を担い、両者をどう調和させるかが人間に課された課題である。残すべきものと忘れるべきものを意識的に選び取ることで、未来へ意味ある時間を渡す道だと結論している。

チェックリスト

- 本文全体の流れを要約できているか
- 「記録／記憶」「保存／忘却」の対比を明示したか
- 自分の言葉でまとめ直しているか

【第二問】土管の奥へ

地上の街は、昼も夜も光に満ちていた。電飾の看板は季節に合わせて色を変え、交差点の信号は規則正しく瞬きを繰り返す。人は音楽を耳に差し込み、画面を親指で滑らせながら歩く。だが、その足元には、別の時間がゆっくりと流れる世界が広がっている。冷えた湿気、鉄と苔の匂い、石壁を這う微かな水音——そこを知るのは、わずかな人間だけだ。

村瀬はその世界の住人だった。配管工として二十年、地図にない分岐を身体で覚え、暗闇の匂いで故障箇所の見当をつける術を身につけた。上では誰も見ない影の仕事だが、影が崩れれば光も立たない。自分の役目は、街の見えない血流を保つこと——村瀬はそう思っていた。

秋の午後、計器が低い警告音を鳴らした。幹線のさらに奥で流量が乱れている。原因不明。市役所の担当は「念のため」と言ったが、村瀬は勘で「念のため」では済まないと知った。工具箱を背負い、ヘルメットの灯りを点け、地下へ降りる。地上のざわめきが蓋一枚で途切れ、別の音階が耳を満たした。

土管の中は低く長く、息はひんやりと肺に落ちた。灯りが円錐形に前方を切り取り、壁面の水滴が星のように光る。水面は濁っているが、眼が慣れると、そこには色と形の断片が混じり合っていた。

最初に流れてきたのは、耳の欠けた小さなぬいぐるみ。綿が一筋、糸のようにほどこけて揺れている。次いで古びた教科書の頁。赤鉛筆で「がんばれ」と書かれた文字は湿り気で太り、誰かの声の重さをいまも宿しているようだった。村瀬は手袋越しに拾い上げ、光に透かして見た。紙の繊維に、いくつもの指の脂が染み込み、日々めくられた時間が層になっている。

進むたび、ものの種類は増える。錆びた自転車のベル——指で弾くと、鈍い音がひとつこぼれた。片方だけの靴、つぶれた紙風船、油の染みた作業手袋、壊れたスマートフォンは画面にひびを走らせて沈んでいた。誰にも届かなかった封筒には「愛している」の一行だけが残り、宛名と切手の部分は剥がれている。

水に半分沈んだ菓子の空き箱には、期間限定の鮮やかな印刷。季節は過ぎ、甘さは溶け、色だけがここに残る。祭りの仮面、リボンの切れ端、磁石の外れた冷蔵庫のメモ―冷蔵庫の白い面から剥がれ、ここまで流れ、そして止まる。

村瀬はふと足を止め、耳を澄ませた。上から、遠い街の鼓動がわずかに響く。地上の一定のリズムに対して、この地下の流れは気まぐれだ。渦が生まれ、物が巻き込まれ、重さの順に沈む。重いものほど早く底へ行き、軽いものほど壁にとどまる。必要とされた時間も、捨てられた理由も、ここでは同じ水位に並ぶ。

ベルを手にしたとき、村瀬は息子の声を思い出した。補助輪を外した日、転んで膝をすりむき、泣きながら「もう一回」と言った背中。あのとき鳴ったベルの音は、いまこの鈍い一音とは違って、やわらかく空気を震わせた。ものは同じでも、響きは違う。響きをつくるのは時間と場所だ。村瀬はベルを水に戻し、先へ進んだ。

空間が広がり、天井が高くなった。そこで村瀬は紙片の丘に出会った。斜面をなすのは、手紙、日記、メモ、プリントアウト、レシート、招待状。湿った紙は互いに密着し、ところどころで剥がれて垂れ下がっている。

彼は一枚をそつと剥がし、灯りを当てた。インクが滲む行間から「ほんとうは言いたかった」「あの時ごめん」という語が浮かび上がる。別の紙には、修正テープで消された「さようなら」の痕。消しきれずに出た角が、白い鱗のように光る。

村瀬の胸に、古い痛みが刺さった。妻と最後に言い争った夜のこと。台所で、皿を片付ける音が強くなり、言葉が衝突し、黙りが壁のように立った。言えば崩れると分かっている一言―「すまなかった」が、喉の手前で固まったまま朝になった。朝はいつも通りに来て、夕方はいつも通りに暗くなった。それから月日は過ぎ、別々の部屋で別々の光を見上げる生活が定着した。

「言い淀みは、どこへ行くのだろう」

答えは今、足元にあった。言い淀みは流され、目に触れぬ場所で積もる。紙片の丘の中には、幼い文字で書かれた「おめでとう」や「ただいま」も混じっている。嬉しさも、帰還も、捨てられることがあるのだ。喜びが捨てられるとき、それは何

に変わるのか。村瀬には分からない。だが、紙の端に残る指の跡は、どれも温かい。温かいまま、ここまですり着いて冷えたのだ。

丘のふもとに、写真がまとまって落ちていた。海辺で笑う家族、運動会のゴールテープ、浴衣の柄。色は抜けつつあるが、笑顔はまだ笑っている。写真は黙っているが、黙ることによって多くを語る。村瀬は一枚を胸に当て、静かな呼気を吐き、そっと戻した。

さらに奥——水音がふくらみ、空洞は巨大な甕のように反響を返す。そこで村瀬は、これまで見た何ものとも違う堆積に出会った。

瓶でも缶でもない。紙や布でもない。そこに沈殿していたのは「言葉」だった。——「努力」「愛情」「信頼」「未来」「効率」「正義」「だいじょうぶ」「お前のため」「本音」「建前」。

泥に沈み、壁に貼りつき、天井から糸のように垂れ下がる。言葉は物質ではないはずなのに、ここでは目に見え、触れられるほどに濃くなっている。何度も吐き出され、意味を摩耗し、やがて重さを得て落ちてきたのだ。

村瀬が手を伸ばすと、「だいじょうぶ」が指に触れた。冷たく、薄い。

『だいじょうぶ』は小さく言った。「私は何度も使われたよ。誰かを慰めるために。自分をごまかすために。やがて、誰も信じなくなった」

その隣で「正義」が、硬い音で笑う。「私ほど便利な言葉はない。掲げられ、振り回され、折れ曲がり、最後はここへ落ちる。重かったらう？」

壁際に「未来」は、かすかに明滅していた。「私は、呼びかけがなければ暗くなる。呼ばれ過ぎてても、薄くなる。息継ぎをさせてください」

天井近くで「効率」は素早く滑った。「私で速度は上がる。だが、熱は下がる。熱が冷えた場所から、人は離れる」

遠くから「愛情」が、傷だらけの声で囁いた。「私は言われるほどに軽くなる。渡されるときに重くなる。どうか手を貸して」

言葉たちは、互いの傷口を見せ合いながら、まだ語ろうとしていた。語ることを

あきらめていない。

村瀬は足元に沈む小さな光を見つけた。「希望」だ。泥にまみれながら微かに温い。拾い上げると、掌でほんの少し震えた。

『希望』は言った。「私は、握られないと冷える。見られないと暗くなる。けれど、捨てられても、また拾われることがある。あなたは、どうする？」

村瀬はしばらく黙っていた。答えは簡単ではない。だが、握るといふ動作だけは、いまここでできる。彼はゆっくりと拳を閉じ、胸のポケットに光をしまった。光は布越しに、心臓の拍に合わせてかすかに明滅した。

言葉の甕を離れ、出口へ向かう通路で、村瀬は歩みを緩めた。暗闇の匂いが少し薄くなり、遠い風の気配が鼻をくすぐる。足は前に出るのに、意識は過去へ戻る。

配管工をはじめたばかりの頃、年長の職人から教わったことがある。「土管は音で話す」と。その男――山科は、壁を指の関節で軽く叩き、返ってくる響きで亀裂の位置を知った。「音は嘘をつかない。嘘をつくのは、音を聞こうとしない人間だ」と笑った。

その山科が最後に現場を離れる日、二人で缶コーヒーを分けた。山科は缶のプルタブを外して、寂しげにポケットにしまった。「いつか、これもどこかへ流れてくんだ」と言った。村瀬は笑って「上で捨てるなよ」と返したが、いま思えば、あとき山科がしまったのは金属ではなく、時間の端だったのかもしれない。

さらに遡る。少年の頃、川で拾った青いガラス片。陽にかざすと、世界は青くなつた。母は「危ないから捨てなさい」と言った。言われたとおりには捨てた。だが、その青さは目の奥に残り、いまも時々、地下で灯りを当てる手つきに影響する。捨てたものが、捨てきれずに残ること。残したものが、いつの間にか失せること。

息子が描いたクレヨンの絵――太い線の太陽と、並んだ二つの丸い顔。額に入れて壁にかけた。引越しのとき、段ボールのどこかに入れたはずだが、見つからない。代わりに、ここでクレヨンの跡を見た。どこかの壁に残る震える線。子の手と同じ高さ。見つからない絵は、地下で別の絵と混ざり合い、別の子の線と重なって、

どこかへ流れていったのだろうか。

妻へ言えなかった一言は、紙片の丘に混じっていたかもしれない。言えなかったからこそ流れたのか、言えたとしても流れたのか。村瀬には分からない。けれど、いま胸にしまった「希望」を握る手に、かすかな汗が滲む。汗は真水ではない。塩分を含み、皮膚の記憶を運ぶ。握りしめたものは、やがて手放される。手放したもののいくつかは、ここへ来る。ここで冷え、いつか誰かにまた拾われる。拾い直すこと——人はそれを「やり直し」と呼ぶのかもしれない。

通路の曲がり角で、村瀬は壁に耳を当てた。遠くで水が吸い込まれる音。上で誰かが流しの蛇口を閉める音。蛇口の金属音は、夜の台所の記憶とつながる。台所の蛇口は、あの夜、長くしずくを落としていた。止めようとする、またしずくが生まれた。止め方が分からないことは、この仕事をしていても、ある。

梯子が現れた。上へ伸びる金属の梯子は、冷たく、頼りになる。村瀬は一段ずつ確かめるように登り、蓋に手をかけ、押し上げた。

光が落ちてきた。夕暮れの、温かい橙色。街の音が一気に広がる。自転車のブレーキ、犬の足音、店の戸が開く鈴の音。焼き鳥の煙が風に乗る、醤油の焦げる匂いが鼻腔をくすぐる。

歩道の脇では、小学生が縄跳びをしていた。「百回いける？」と声が飛び、「いける！」と足が弾む。いける、という言葉は軽い。その軽さは、地下で見た言葉の重さを、少しのあいだ忘れさせる。忘れることは、罪ではない。忘れるから、人は次の足を上げられる。

コンビニの店員が、段ボールを畳みながら空を見上げた。空には細い月。月の下で、信号が点滅を続ける。路地からはラジオの野球中継が漏れ、誰かが「惜しい」と笑う。惜しさは、次を呼ぶ合図だ。

村瀬は工具箱を持ち直し、胸のポケットに触れた。「希望」は布越しに温かい。あの甕で拾った光は、地上に出ても消えなかった。消えないのではなく、消えかけるとたびに、どこかから補給されているのかもしれない。たとえば、縄跳びの「いける」

という軽い声から。たとえば、焼き鳥の煙に混じる笑い声から。

家へ向かう道すがら、村瀬はスマートフォンを取り出し、画面に映る連絡先を眺めた。息子の名前、妻の名前。指は一瞬ためらい、画面を消した。いまは、まだ言葉を選ばない。選ばない言葉を、地下へ流す代わりに、胸の「希望」を強く握る。握ることで、言葉は少し待っていてくれる。待ってくれる言葉は、いつか届く。

信号が青に変わり、村瀬は横断歩道を渡った。靴底にアスファルトの粒が当たる感触。地下のぬかるみとは違う乾いた確かさ。彼はふと、ポケットから小さなものを取り出した。山科がしまっていたのと同じ、缶コーヒーのプルタブ。現場の自販機で買った缶の蓋。無意識に外し、ポケットへ入れていたらしい。金属片は夕暮れの光を受けて、わずかに輝いた。

村瀬はそれを、近くのポストの上にそっと置いた。誰かが拾うかもしれないし、風が落とすかもしれない。置くことで、世界に小さな選択を預ける。預けることは、委ねることだ。委ねることは、手放すことと同義ではない。手放した端は、どこかで誰かにつながる。

空は藍に沈み、最初の星がひらりと姿を見せた。地下の闇と地上の光は、敵ではなく、交代制の同僚のようだ。どちらかが休むあいだ、どちらかが働き、交代のたびに短い挨拶を交わす。

村瀬はもう一度、胸のポケットを押さえた。言葉は重くなると沈む。だが、重いからこそ、握れば温まる。温まった言葉は、もう少しだけ遠くへ届く。

街の角を曲がる風が、どこからか水の匂いを運んできた。地上にも、地下の気配はある。地下にも、地上の気配は染み込む。両方を往復する者として、村瀬は今日も、明日も、蓋を開け、蓋を閉める。

土管の奥に堆積していたのは、人間が捨てたものではなく、人間が生きた証の、別の姿だったのだと——そう思いながら。

設問

問一（40字程度）

本文において、配管工・村瀬が「漂流するもの」から感じ取った人間社会の特徴を簡潔に述べよ。（10ページ18行目～）

問二（50字程度）

紙片の丘に堆積していた「言い淀み」や「消し去られた言葉」は、人間のどのような側面を象徴しているといえるか（11ページ12行目～）。本文に即して説明せよ。

問三（60字程度）

「言葉」が物質のように甕に沈殿していた場面（12ページ7行目～）は、人間のどのような営みを比喩的に示しているか。本文中の表現を踏まえて説明せよ。

問四（80字程度）

本文では「希望」という言葉が拾い上げられ、ポケットにしまわれる描写（13ページ2行目～）がある。この行為が物語全体において持つ意味を説明せよ。

問五（120字程度）

村瀬は土管の中で廃棄された物や言葉を見ながら、自身の過去の記憶（家族、仕事、幼少期の体験）を思い出す（13ページ11行目～）。こうした回想が本文の主題とどのように結びついていくかを説明せよ。

問六（130～150字程度）

地上に戻った村瀬は、子どもの笑い声や日常の音の中に「希望」の光を感じ取る。（14ページ14行目～）この描写は、地下での体験と対比的にどのような意義を持つ

つか。本文全体の趣旨に即してまとめよ。

【解答・解説】

総括

第二問「土管の奥へ」は、地下の暗い世界に堆積した廃棄物や言葉を通じて、人間の「忘却」と「記憶」のあり方を照らし出す作品である。村瀬が見た物や聞いた声は、人間社会が捨て去ってきた痕跡であり、同時に彼自身の人生の影とも重なっている。

設問全体を通して受験者が問われるのは、

- ・ 捨てられた物や言葉が象徴する人間の姿を読み取る力
- ・ 比喩的な描写を社会や人間存在の問題と結びつける力
- ・ 地下と地上の対比から作品の主題を統合的に捉える力である。

最終的に、地下で拾った「希望」が地上での光や声と響き合うことで、「忘却と再生を往復する人間の生」という主題が浮かび上がる。

したがってこの問題は、単なる場面理解を超えて、比喩・象徴・対比の解釈を総合する読解力を育成する設計となっている。

問一

模範解答

人間は日常の痕跡や記憶さえも容易に手放し、流れに任せて忘却している存在である。

別解例①

役目を終えた生活の断片はすぐ廃棄され、人々の無関心と欲望を反映して流れていく。

別解例②

捨てられた物は人間の営みの一部であり、無自覚な忘却の積み重ねとして社会を映している。

自己採点チェック

- 捨てられた物が「人間社会や生活の断片」である点に触れているか。
- 「忘却」「無自覚」といった人間の態度に言及できているか。
- 単なる物の描写ではなく、その背後の社会性や人間性を指摘しているか

問二

模範解答

言い淀みや消された言葉は、人間が弱さや後悔を直視せず、無意識に記憶から追いやろうとする姿を象徴する。

別解例①

言葉にできなかつた感情や謝罪は処理されず沈殿し、人間が未解決の思いを隠し持ちながら生きる姿を示している。

別解例②

消された言葉は人間が不都合な真実を覆い隠そうとする心の動きを表し、弱さを抱えた存在であることを示唆する。

自己採点チェック

- 「言い淀み」や「消された言葉」が本文で象徴する内容を把握できているか。
- 人間の「弱さ」「後悔」「不都合な真実」など心理的側面に言及できているか。
- それを単なる出来事ではなく、人間存在の一般的特徴に結びつけて説明しているか。

問三

模範解答

言葉が甕に沈殿する描写は、人間が乱用し摩耗させた言葉を消費物のように扱い、やがて価値を失わせてしまう営みを象徴している。

別解例①

多用され信頼を失った言葉が物質のように沈む様子は、人が言葉を道具として使い果たし、意味を擦り切らせて捨てる営みを比喩的に示している。

別解例②

言葉が物質化して沈む姿は、人間が言葉を乱用し形骸化させる過程を示し、過剰使用によって価値が摩耗していく現象を象徴的に描いている。

自己採点チェック

- ・ 言葉が「物質のように沈殿する」という比喩的描写を押さえられているか。
- ・ 言葉が「乱用」「摩耗」「消費」といった形で価値を失う過程を捉えているか。
- ・ 人間社会における言葉の使われ方や変質の問題と結びつけて説明できているか。

問四

模範解答

「希望」を拾いポケットにしまう行為は、捨てられた言葉から再び意味を汲み取るうとする姿勢を示し、物語全体で人間が失われた価値を取り戻し得る再生の可能性を象徴している。

別解例①

「希望」を抱え込む行為は、廃棄された言葉の中に再び温かさを見出す意思を示し、沈殿に覆われた世界からも人間が新しい意味を創出し、生を立て直す契機を示唆するものである。

別解例②

「希望」を保存する姿は、忘却された中に潜む価値を大切にする意志を表し、言葉の再生を通じて人が生き直す力を描き出す象徴的場面として全体の趣旨を支えている。

自己採点チェック

- ・ 「希望」を拾い、ポケットにしまう行為の象徴性を説明できているか。
- ・ それが「再生」「価値の取り戻し」「未来への可能性」といった主題とつながっているか。
- ・ 行為の単なる描写で終わらず、物語全体に対する意味を示しているか。

問五

模範解答

村瀬が過去の家族や仕事、幼少期を思い出す回想は、土管に堆積した廃棄物や言葉と照応し、忘却と記憶の問題を自分自身に引き寄せて考える場面となっている。そのことで読者は主題を抽象概念ではなく人間的実感として理解できるようになる。

別解例①

廃棄物に触れた村瀬が記憶を思い起こす描写は、ゴミが単なる物質でなく人間の感情や時間の痕跡であることを際立たせる役割を担う。社会的象徴に個人の体験が重なり合うことで、忘却と記憶という主題が抽象性を脱し、具体的な人間像を伴って迫ってくる構造になっている。

別解例②

過去を思い返す場面は、村瀬が土管の中の物に自己を重ね、忘却と記憶が人間の営みと不可分であることを理解する契機となっている。個人的な回想は象徴的場面と結びつき、主題が生活に根差したものとして読者に実感される構造をつくり上げている。

自己採点チェック

- ・ 村瀬の回想（家族、仕事、幼少期）が本文で果たす役割を押さえているか。
- ・ 回想が「廃棄物や言葉」と響き合っている点を説明できているか。
- ・ 主題（忘却と記憶、人間存在）を「抽象」から「具体」へと読者に近づける働きに言及しているか。

問六

模範解答

地上に戻った村瀬が子どもの声や日常の音に「希望」を感じ取る場面は、地下で見た廃棄や沈殿の光景と強い対比を成している。失われたものがあっても人間社会は日常を営み、新たな言葉や笑いを生み出し続けるという循環を示している。これにより本文全体の趣旨である「忘却と再生の往復としての人間の生」が鮮明に示されている。

別解例①

地下の暗さと地上の光の対比は、人間が絶望と希望の両方を抱きながら生きていることを照らし出す。沈殿し捨てられたものに満ちた地下の記憶と、軽やかな声に満ちる地上の日常は矛盾ではなく補完関係にあり、人はその往復を通じて生命を保っている。この場面は忘却と記憶の循環が希望を生む仕組みを象徴的に示している。

別解例②

地上で耳にする子どもの声や匂いは、地下での沈殿の記憶と照応しながらも、そこに再生の力を付与している。暗闇に埋もれた言葉や感情は、地上の営みによって呼び戻され、再び温度を帯びる。地下と地上の往復を経て、人間が忘却と記憶を交互に生きる存在であることを物語は強く浮かび上がらせている。

自己採点チェック

- 地下と地上の「対比」の構造を明確に押さえているか。
- 子どもの声や日常の音が「希望」と結びついていることを説明できているか。
- 本文全体の趣旨（忘却と再生を往復する人間の生）を結論としてまとめられているか。

【第三問】許すということ——医療の現場から考える

「許す」という言葉ほど、使うたびに重さの変わるものもないだろう。

私たちは日常の中で「いいよ」「気にしないで」という軽やかな赦しを口にする。しかし、その同じ言葉が、誰かの命の消失や、取り返しのつかない過ちに直面したときには、まったく異なる次元の問いとして立ち現れる。許すとは、いったい何を意味するのか。私は医療の現場で起きた一つの事例をきっかけに、その言葉の奥行きを考えるようになった。

ある外科医が、手術中の判断の遅れから患者を失った。四十代の母親が、十二歳の息子を病室で見送ることになった。手術前日まで元気だった少年の姿を思えば、その喪失の衝撃は想像に余りある。報告書には「術中合併症」と記され、病院は「不可抗力」と説明した。しかし母親は、その言葉の中に息子の生が整理され、処理されていくことに耐えられなかったという。

「誰かが悪いと決めたいわけではない。ただ、あの子の死が誰の言葉でもなく、ただの“事例”として終わってしまうことが怖かった」

彼女はそう語った。

この種の出来事に、誰が「正しい」答えを持ちうるだろうか。裁判を起こすことも、沈黙を選ぶことも、どちらも一つの決断である。社会はしばしば「責任」を求めるが、その求めの中に、どれほどの癒しが含まれているだろう。むしろ、「責任」の語がもたらすのは、冷たい線引きではないか。制度の外側に残るのは、当事者の胸の中で燃え続ける痛みである。

医療の現場では、「人間が人間を治す」という根本的な矛盾を抱えている。医師は技術と判断を尽くすが、身体の奥に潜む不可知な部分にまで完全に到達することはできない。過誤は、意図の有無にかかわらず生じうる。そこに「許し」が入り込む余地があるとすれば、それは罪を軽くするためではなく、人間が限界を抱えながら生きる存在であることを見つめるためだろう。

ある哲学者は、「赦しとは、計算を超えるものである」と述べた。謝罪や償いが「交

換の倫理」に基づくなら、赦しはその外にある。

——もうよい、という言葉、誰が、どの時点で、どんな思いで口にできるのか。医師が再びメスを握るその手の震えのなかにも、母親が息子の名を呼ぶ夜の沈黙のなかにも、「赦し」に向かう時間は流れている。

この母親は、数年後、ある地方の診療所を訪れた。年老いた母が体を悪くし、急遽そこへ運ばれたのだ。診察室に入った瞬間、医師の名札を見て彼女は息を呑んだ。あのとときの外科医だった。

彼は彼女に気づいたが、動揺を見せなかった。ただ、手の動きが微かに固くなったという。

その後、母親は快復し、診療を終えた。別れ際、彼女は何も言わなかった。けれども病院を出たあと、受付に立ち寄り、伝言を頼んだ。

——「ありがとうございます。先生にそうお伝えください」
それだけだった。

その言葉の中に赦しがあったかどうかは、本人にもわからない。ただ、あの日以来、彼女は「怒り」に寄り添うのではなく、「命を委ねた時間」に寄り添うようになったという。

私はこの話を聞かされた時に、「許し」とは他者を *absolve* (免責) する行為ではなく、むしろ自分を再び他者へと開く勇氣ではないかと思う。過ちをなかったことにするのではなく、過ちの存在を抱えたまま、それでも他者へ向かうこと。

それは、赦す者にとってもまた「回復」である。赦しとは、相手を自由にするだけでなく、自分を苦しみから解放する一つの道なのだ。

医療は科学であり、同時に関係である。薬や手術は身体を癒すが、人を癒すのは言葉である。だが言葉は万能ではない。謝罪も説明も、すべてを救うことはできない。それでも人は、言葉を手放すことができない。

なぜなら、言葉は「関係の扉」を閉じずにおくための最後の手段だからだ。

母親が「ありがとうございます」と言えたのは、医師を赦したからではなく、

言葉を閉ざすことが、自分自身をもう一度傷つけることになると感じいたからではないか。

許しとは、感情の静止ではなく、関係の継続である。

それは「和解」ではなく、「共存」の選択である。

人間は他者を完全に理解することはできない。にもかかわらず、互いに向き合い、名前を呼び合い、言葉を交わし続ける。その営みこそが、赦しの根にあるものだ。

医療だけでなく、教育や家庭、社会のあらゆる場で、私たちは日々小さな過ちを犯す。完璧な人間はいない。しかし、「完璧でないまま生きること」を引き受けるとき、人はようやく他者の不完全さにも優しくなれる。

許しとは、正義を棄てることではない。正義の向こう側にある、もう一つの人間性に手を伸ばすことだ。

医師と母親のあいだに、明確な和解の瞬間はなかった。それでも、互いに背を向けず、言葉を交わす場所があったという事実。それだけで、すでに赦しの一端は生まれていたのかもしれない。

赦すということ——それは、過去を裁く力ではなく、未来をつなぐ力である。

人が人を生かすとは、その不完全さを抱えたまま、なおも向き合おうとすることにほかならない。

設問

問一

本文冒頭で筆者は『「許す」という言葉ほど、使うたびに重さの変わるものもないだろう』と述べている。筆者が「許す」という行為の多義性を示すために取り上げた事例を簡潔に説明せよ。(50字程度)

問二

筆者は医療過誤を「制度の内側」と「外側」から考察している。本文中において「制度の外側に残るもの」とは、どのようなものを指しているか。(50字程度)

問三

筆者は、謝罪や償いを「交換の倫理」に基づくものとし、それに対して「赦し」はその外にあると述べている。筆者がここで区別している二つの倫理の違いを、あなたの言葉で説明せよ。(70字程度)

問四

母親が「ありがとうございました」と伝言を残した場面について、筆者はそれほどのように解釈しているか。本文の内容に即して説明せよ。(90字程度)

問五

筆者は「許しとは、感情の静止ではなく、関係の継続である」と述べている。この考え方の意味を、本文全体の文脈に基づいて具体的に説明せよ。(100字程度)

問六（発展）

筆者は「人が人を生かすとは、その不完全さを抱えたまま、なおも向き合おうとすること」と結んでいる。この一文が示す「人間の在り方」について、本文全体を

踏まえ、自分の考えを述べよ。(120字程度)

【解答・解説】

問一

模範解答

医療過誤で息子を亡くした母親と外科医の関係を通して、許しの複雑な意味と人間の限界を示している。

別解例 1

手術中の判断ミスで命を失った少年と、その医師と母親の関係を題材に、赦しの重さを考察している。

別解例 2

医療事故による母親と医師の苦悩を通し、赦しが単なる感情ではなく、人間の在り方に関わると述べている。

自己採点チェック

- ・ 「母親」と「医師」という二者関係が明記されているか
- ・ 「許し」や「赦し」の主題と結びつけて説明しているか
- ・ 単なる事件紹介でなく、筆者の主張（多義性・人間性）に触れているか

問二

模範解答

裁判や制度では癒されない、当事者の心に残る痛みや喪失感、そして答えのない苦しみを指している。

別解例 1

法的な結論では整理できない、遺族の胸に残る悲しみや怒りなど、感情の領域に属するものを意味している。

別解例 2

社会の「正しさ」では救えない、個人の内側に生じる絶望や空虚、再生への葛藤といった精神的残響を指す。

自己採点チェック

- ・ 「制度（裁判・法）」と対置される「心の問題」を明確に書いたか
- ・ 「癒えない痛み」「悲しみ」「感情」など具体的表現を盛り込んだか
- ・ 「筆者の観点（制度で救えないもの）」を再現しているか

問三

模範解答

「交換の倫理」は謝罪や償いによって均衡を回復する関係だが、「赦し」はその計算を超え、過ちを抱えたまま他者と関係を続ける行為であると筆者は述べている。

別解例1

前者は過去の過ちを補う行為であり、均衡を求める倫理だが、後者は損得や償いを超え、痛みを抱えたまま相手と共に生きようとする姿勢を指している。

別解例2

謝罪や償いは原因と結果を釣り合わせようとする応報的關係だが、赦しはその枠を越え、関係そのものを再び結び直す人間的行為として描かれている。

自己採点チェック

- ・ 「交換の倫理」釣り合いを取る関係」を明確に説明しているか
- ・ 「赦し」計算を超える／関係を続ける」という要素を盛り込んだか
- ・ 両者の対比を構造的に書いているか（順序・対応が明確）
- ・ 抽象で終わらず、行為や関係など具体的語を用いているか

問四

模範解答

筆者はその言葉を、医師への完全な赦しではなく、母親が再び他者に心を開こうとする行為として捉えている。彼女は怒りに寄り添うのをやめ、言葉を通して関係を閉ざさぬ勇気を示したと筆者は考えている。

別解例 1

筆者はこの言葉を、赦しそのものというよりも、沈黙を越えて他者へと向かう一步として評価している。母親は悲しみを抱えながらも、言葉を断たずに関係を保とうとした象徴的な行為とされている。

別解例 2

母親の言葉を、筆者は「赦し」ではなく「関係をつなぐ意志」として捉えている。彼女は医師を責める代わりに、自らを閉ざさぬことを選び、言葉によって再び他者と生きる道を選んだと解釈されている。

自己採点チェック

- 「赦しそのものではない」という筆者の立場を明確に書いたか
- 「言葉」「関係」「他者へ向かう」というキーワードを含めたか
- 行為の意味を心理的・倫理的両面から説明できたか

問五

模範解答

筆者は、許しを怒りや悲しみを消すことではなく、それらを抱えたまま他者と関係を保つ営みだと考えている。人は過去を忘れて和解するのではなく、不完全さを共有しながら生き続けることに許しの本質があると述べている。

別解例 1

筆者は「関係の継続」を、感情を否定せずとも相手と向き合い続ける姿勢と捉えている。赦しとは感情を停止させることではなく、痛みや矛盾を受け入れながら共に生きる行為であると主張している。

別解例 2

この一文は、赦しを「終わり」ではなく「続き」として描く筆者の思想を示している。怒りを克服するのではなく、その存在を抱えながら相手と共に歩むことが、真の関係であり、許しの形であるとしている。

自己採点チェック

- ・ 「感情を消す／静止させる」こととの対比を明確にしたか
- ・ 「関係が続ける」という表現を中心に据えて説明できたか
- ・ 本文全体の主張（人間の不完全さ・共存）とつながっているか

問六（発展）

模範解答

筆者は、人間が互いに完全であろうとするのではなく、不完全な存在同士として関わり合う姿を理想としている。過ちや痛みを抱えたまま他者と向き合うことで初めて、理解や共感が生まれるとし、許しをその継続的な努力として位置づけている。

別解例 1

筆者の言う「不完全さを抱える」とは、弱さや過ちを否定せず、その上で関係を保とうとする人間の成熟を指している。人を生かすとは、相手の欠点を補うことなく、限界を知りながらも歩もうとする意志のことであると私は考える。

別解例 2

この言葉は、完全な赦しや正しさを求めるのではなく、不完全なまま関係を続けようとする人の尊さを示している。人は失敗や苦しみを経てなお他者へ手を伸ばすとき、はじめて真の「生かす」という行為に近づくのだと筆者は訴えている。

自己採点チェック

- ・ 「不完全さを抱えたまま向き合う」という表現を正確に理解しているか
- ・ 「人が人を生かす」とは何を意味するかを自分の言葉で述べたか
- ・ 本文の主題（赦し・関係・継続）と自分の考えが有機的に結びついているか
- ・ 主張に抽象性だけでなく「人間の姿」や「行為」の具体性を盛り込んだか

◆ 全体総括

この随筆で筆者は、「許す」とは感情の終息ではなく、不完全な人間同士が関係を

続ける力であると説いている。

「制度では癒せない痛み」「交換を超える倫理」「言葉を閉ざさない勇気」など、複数の角度から「赦し」を掘り下げ、最終的にそれを他者と共に生きる行為として再定義している。

したがって、本作の読解では――

- 感情的赦しと倫理的赦しの違いを理解すること
- 言葉や関係を通して人が「生かし合う」構造を読み取ること
- 自分の立場から、人と関係を続ける意味を再考すること

――が重要な着眼点となる。

【第四問】光の遅さについて

光は宇宙で最も速いとされるが、その速さにも限りがある。地球に届く太陽の光は八分十九秒前に発せられたものであり、星空に輝く光は何千年、何万年も前のものもある。私たちは常に過去を見ている。目の前にあるはずの「いま」は、実のところ、すでに過ぎ去った瞬間の残像なのだ。この事実を知るとき、私たちは時間というものの不思議な性質——現在が過去によって成り立っているということ——に気づかされる。

この「遅れ」は物理的な現象であると同時に、私たちの認識のあり方にも深く通じている。たとえば、人生のある出来事をその瞬間に正確に理解することは難しい。親との別れや、友人との衝突、あるいは思いがけない成功——それらの意味は時間が経ってからしか分からない。後になって「あのときの自分はこう感じていたのか」と気づくことがある。人間の理解もまた、光のように遅れて届くものなのだ。感情も思考も、すぐには形を結ばない。だがその遅れがあるからこそ、経験は深く、意味を持つ。

現代社会はこの遅れを受け入れにくくしている。SNSでは発言が即座に共有され、返信は数分で返る。ニュースはリアルタイムに更新され、知識も瞬時に検索できる。速さが価値とされる時代であって、「待つ」という行為はしばしば非効率や怠慢とみなされる。しかし、理解や思考はそもそも時間を要する営みである。急いで得た答えは、たいてい表層的な納得にすぎず、深い理解には至らない。たとえば、教育現場でも「すぐに答えを出す生徒」が評価されやすいが、じっと考え込み、自分の中で言葉を探す時間を持つ生徒こそ、真に学びを体得していると言えるのではないだろうか。

思考とは、光のように外界を照らすだけでなく、影をつくる働きでもある。影があるからこそ形が見えるように、理解には明るさと遅さの双方が必要である。もし光が完全に瞬時であれば、影は生まれない。すべてが明るみに出た世界では、深さも奥行きも失われる。人間関係も同様だ。相手の意図や感情をすぐに理解しようと

すれば、表面的な言葉だけを受け取り、本当の思いを取り逃がしてしまう。相手の「沈黙の時間」や「言葉にならない間（ま）」を待つことによって、ようやくその人の内側に触れることができる。つまり、遅れは他者を理解するための空間であり、関係が育つための時間なのである。

医療の現場でも、同じような構造がある。診断のスピードが命に関わる場面は確かにあるが、一方で、患者が自分の病気を受け入れるまでには時間が必要だ。どんなに医師が迅速に説明しても、患者の心が追いつかなければ、理解は成立しない。身体の治療と同時に、心の理解を「待つ」ことが求められる。光の速さでは届かない領域にこそ、人間の真の癒しがある。速さが正義であるという現代的な感覚は、このような人間の時間のリズムを無視してしまいがちである。

さらに視野を広げれば、自然界は「遅さ」によって秩序を保っている。季節は巡り、発芽や結実には一定の時間が必要である。発酵食品がゆっくりと熟成していくように、生命は急かされることを拒んでいる。人間だけが、時間を「短縮」しようと試み続けている。だが、成熟には必ず時間が要る。たとえばワインもチーズも、ある段階を飛ばしては成り立たない。私たちの思考や感情も同じだ。理解は発酵しながら育ち、時間をかけてようやく「味わい」として定着する。

このように見ていくと、「遅さ」とは単なる反応の鈍さではなく、世界の深さをつくる構造そのものだと言える。光が距離を経て届くように、人の理解も距離を経て生まれる。距離を埋めようと焦ることは、しばしば関係を壊す。むしろ距離を尊重し、その間を照らす光を信じるからこそ、成熟した関係性のあり方なのではないか。教師が生徒の成長を待ち、親が子の独立を見守るように、待つという行為の中には、相手の可能性を信じる姿勢がある。

光の遅さは、世界がばらばらでありながら、なおつながっていることの証でもある。もし光が瞬時に届くなら、時間も距離も存在しない。すべてが同時である世界では、関係という概念も意味を失うだろう。遅れがあるからこそ、私たちは「出会う」ことができる。出会いとは、遅れて届くものがあるということにほかならない。

速さはしばしば効率と結びつけられるが、遅さには深さが宿る。光が星々を渡り、何万年もかけて地球に届くように、人間の思考や感情も時間をかけて世界に浸透していく。言葉もまたそうだ。ある人の発した言葉が、年月を経て別の人の心に届くことがある。それが文学であり、教育であり、文化の伝達である。遅さとは、意味が成熟して届くための時間のことなのだ。

光が遅いという事実は、宇宙の構造を示すと同時に、人間が生きるための知恵でもある。私たちは遅れて届く光の中に生きている。理解も感情も、すぐには形にならない。だが、遅れることは、失うことではない。届くまでの時間が、世界を豊かにしている。

光が距離を旅するように、私たちの思考もまた、時間という空間を進み続ける。その遅さを恐れずに歩むこと——それこそが、速さを支配するこの時代において、もつとも人間的な営みなのかもしれない。

設問（※本問では字数の提示を行いません。）

問一

本文中で筆者は、「光の遅れ」と「人の理解の遅れ」とを重ねて論じている。この比喩が示している「理解の性質」とはどのようなものか、簡潔に説明せよ。

問二

筆者は「速さが価値とされる現代社会」に対してどのような問題意識を抱いているか。本文の内容に即して答えよ。

問三

本文では「待つ」ことの意義が繰り返し論じられている。筆者によれば、「待つ」という行為は人間関係のどのような在り方を象徴しているか。その理由も含めて説明せよ。

問四

筆者は、光・教育・医療・自然という複数の領域を横断して「遅さ」を論じている。これらの例に共通する視点を挙げ、その意義を具体的に述べよ。

問五

筆者の主張をふまえ、「速さ」と「深さ」の関係をあなた自身の経験に照らして説明せよ。本文の内容と矛盾しないように、自分の考えをまとめよ。

問六

筆者は「光が遅いという事実は、宇宙の構造を示すと同時に、人間が生きるための知恵でもある」と結んでいる。この一文に込められた思想を読み取り、本文全体の構成を踏まえて説明せよ。

【解答・解説】

問一

模範解答

理解は出来事と同時に生まれず、時間をかけてようやく形になる遅い営みであり、その遅れ自体が人間的な深まりの条件になっている。

別解例一

人の理解は瞬時には成立せず、経験が時間の中で熟すことでやっと届くものであり、その遅さゆえに出来事は深い意味へと変換されていく営みである。

別解例二

出来事の直後には本質は見えず、後になってはじめて意味づけが可能になるという、理解が常に遅れて届くという性質そのものが人間の認識だと示している。

【自己採点チェック】

- ・ 「出来事と理解が同時ではない（時間差がある）」ことを書いたか。
- ・ 「遅い」ことを単なる欠点ではなく「深まり／熟成／意味の形成」に結びつけて書いたか。
- ・ 「光の遅れ」との比喩が、人間の理解の構造説明になっている形で言えているか。

問二

模範解答

即時性や効率ばかりが求められる社会では、考える時間や感情が追いつく余白が奪われ、理解が表面的に矮小化されてしまうという点に、筆者は深い危機感を抱いている。

別解例一

反応の速さが評価される社会では、「すぐ分かったつもり」だけが残り、熟考や受け止めの過程が省かれることで、学びや対話が浅く消費されていくことを問題視して

いる。

別解例 2

スピードを優先する価値観は、待つこと・沈黙を聞くこと・心が追いつく時間を軽視し、人間本来の理解や関係形成のプロセスを切り捨ててしまうという危険をはらむと述べている。

【自己採点チェック】

- 「即時性／効率が価値化されている」という現代側の状況をきちんと書いたか。
- その結果として「理解が浅くなる」「心が追いつかない」「対話が損なわれる」などの被害を具体語で書けているか。
- 単に『速いのはよくない』ではなく、「時間が奪われる」↓「深さが失われる」という因果を示せているか。

問三

模範解答

待つことは、他者を自分の速度に合わせて即座に理解しようとせず、その人の感情や言葉が届くまでの距離と時間を尊重する態度を示す。急がずに受け止める姿勢こそが、深い信頼や成熟した関係を生み出すとされている。

別解例 1

待つとは、相手の沈黙や言葉にならない「間」を奪わずに保持することで、相手を自分の枠に押し込めない姿勢を体現する行為である。その余白を守ることが、本当の対話や安全な関係の土台になると示されている。

別解例 2

相手を急いで理解したと決めつけるのではなく、理解が遅れて届くこと自体を引き受けるのが「待つ」ことだとされる。その遅さを受容することで、他者を一方的に消費せず、関係そのものを長く維持し得る成熟が育つと論じられる。

【自己採点チェック】

- 「待つ」他者のペースを尊重する／相手の時間を守る」という説明ができて
いるか。
- 「距離」「沈黙」「間」など、本文にある他者とのあいだの空白をキーワード
として触れたか。
- 最終的にそれが「信頼」「成熟した関係」「安全な対話」につながる、と関係
の質の話まで踏み込んでいるか。

問四。

模範解答

どの領域でも、成熟や受容や癒しは即時には成立せず、ゆっくり進む過程を経てはじめて本物になるという視点が共有されている。この視点は、効率化を急ぐ社会的な速度基準とは別に、「待つことそのものが価値である」という時間の倫理を提示している。

別解例1

星の光が長い距離を旅して届くように、学びや医療的な納得や自然の熟成も段階を飛ばせないという点が共通している。筆者はこの共通性を通じて、短縮や即断をよしとする現代の速度観を相対化し、「過程を尊ぶ態度」の必要性を浮かび上がらせている。

別解例2

教育では考えが熟すまでの思索の時間、医療では心が事実を受け入れられるまでの猶予、自然では発酵や循環のリズムといった、不可避の「待つ時間」が尊重されている点が通底している。これが、人間の成長や関係維持の本質的条件だと示される。

【自己採点チェック】

- 光／教育／医療／自然という複数領域をちゃんと束ねて「共通する視点」を
言語化したか（例・熟成・受容・成熟・過程を飛ばせない）。

- それが現代社会の「スピード基準」と対照的である、という緊張関係まで書けているか。

- 「時間の倫理」「過程の価値」など、本文の抽象レベルに相当するまとめ語を提示できているか。

問五

模範解答

素早く結論を出そうとした場面では、相手の言葉の一部だけで判断してしまい、あとで誤解だったと気づくことが多かった。逆に、即答せず時間を置いたときは、相手の背景やためらいも見えるようになった。速さは安心を与えるが、深さは遅れてしか得られないと感じている。

別解例一

課題で急いで正解らしき答えを探したときは、表面的な説明しかできず、あとで問い直す必要が出た経験がある。いったん距離を置き、資料を読み返したり考え直したりすると、初めて問題の本質が分かった。深い理解は、即時性ではなく熟成の時間から生まれると思う。

別解例二

相手の感情にすぐ「わかるよ」と応じたときほど、その人を余計に追い詰めてしまったと感じる場面があった。反対に、すぐ結論を言わず黙って聴いたときには、相手が自分で言葉を探し始めた。速さは制御だが、遅さは相手に居場所を渡す行為だと今は考える。

【自己採点チェック】

- 自分の具体的な経験（場面・状況・相手）を書けているか。「よくある話」ではなく、自分に引き寄せたか。
- 「速い応答」＝「表層／安心」「遅い理解」＝「深さ／本質」という二層構造をはっきり対比できているか。

- 本文と矛盾しない語（熟成・待つ・背景・本質など）を用い、本文の価値観を踏まえた考察になっているか。

問六

模範解答

光は距離を旅してようやく届くという事実は、理解や関係や癒しも即時には成立しないという人間的な条件と重ねられている。筆者は、教育・医療・自然といった領域を通じて「遅さは未熟さではなく成熟の前提」であることを示し、速さを善とする現代に対し、待つことそのものを価値として再提示している。遅さは欠陥ではなく、生きる知恵だと位置づけられる。

別解例 1

宇宙の光が時間をかけて届くことは、私たちの理解や感情も距離と時間を必要とする、という普遍的な構造を表している。筆者は、即答や即断を良しとする社会の速度観を疑い、他者や出来事に対して「すぐ分かった」と断じず、届くまでを待つ姿勢こそが人間らしさだと示す。本文全体は、物理現象を手がかりに、倫理的な時間感覚を掘り起こしている。

別解例 2

光の遅さは、世界が一瞬で一体化することの不可能性と、だからこそ保たれる関係の距離を示している。筆者はその距離を、教育では熟考、医療では受容の猶予、自然では成熟の循環として描き出し、遅さを「つながりを壊さずに保つ間合い」として評価する。結論は、速度ではなく余白が人間として生かすという形でまとめられている。

【自己採点チェック】

- 冒頭の物理的事実（光の遅さ）と、本文全体の人間論（理解・関係・成熟）を明確に「重ねて」説明したか。
- 本文中に登場した複数領域（教育・医療・自然など）を引用して、全体構成

に触れたか。

- 「遅さ」は欠陥ではなく、価値／知恵」という再定義にきちんと到達したか。
- まとめが要約だけでなく、筆者の提示した倫理的視点（待つことの価値、距離の尊重）になっているか。

◆ 全体総括

この文章は、「速さ」を価値とする現代社会に対して、「遅さ」のもつ意味を多層的に問い直す評論である。

筆者は、光が距離を旅して届くという物理的事実を起点に、人間の理解・関係・成熟といった精神的領域に「遅れ」の概念を重ねて論を展開している。ここでは、「即時に知る」ことよりも、「時間をかけて理解する」ことが人間的な営みとして描かれる。

本文の特徴は、「時間」を抽象的に語るのではなく、教育・医療・自然など具体的な事例に即して構造的に示している点にある。

教育における思索の時間、医療における受容の猶予、自然における熟成の過程――これらに共通するのは、いずれも「待つこと」を前提とした生命のリズムであり、急がずに進むことの中にこそ深さが宿るという認識である。筆者は、この「遅さの倫理」を通して、時間を単なる効率の尺度として扱う社会への対抗軸を示している。構成上は、冒頭で物理現象を提示し、中盤で社会的・人間的時間へと拡張し、終盤で「遅さ＝知恵」として再定義する流れをとる。

この三段構造により、読者は「遅さ」を単なる速度の反対語ではなく、**世界と調和して生きるための根本的な姿勢**として捉え直すことになる。

全体を通じて問われているのは、「あなたにとって、時間とは何か」「理解とはどのように生まれるのか」という根源的な問いである。

現代の学びにおいても、「速く正解を出す力」だけでなく、「遅く考える力」「立ち止まる勇気」が重視されるべきだという、教育的示唆をも含む文章である。

この教材を通して、学習者自身が「時間の使い方」や「考えるという営み」の在り方を再考できるならば、筆者の意図した「光のような理解の旅」は、すでに始まっているといえるだろう。

【第五問】受け入れること ― 境界のない理解へ

私たちは、理解できないものに出会うとき、ほとんど反射のように構えを取る。理屈に合わない現象や、言葉の通じない他者、説明のつかない感情を前にして、人間の思考は緊張し、心はわずかに閉じる。「理解する」とは、対象を自分の世界に取り込むことだ。けれど、理解しきれないものを排除することは、しばしば「安心」のための習慣に過ぎない。

朝、窓辺に射し込む光に心が和らぐ理由を、誰が説明できるだろう。旋律の一節に涙が溢れる瞬間を、どんな理論が言い当てられるだろうか。理解の外にあるものを、私たちはいつも感じている。理屈を越えた何か、確かに私たちを動かしている。それでもなお、私たちは「わかりたい」と願う。

「受け入れる」とは、そうした願いの果てで生まれる静かな態度である。理解を放棄することではない。むしろ、理解しようとする自分の限界を引き受け、そのうえで世界とともに在ろうとする姿勢だ。赦すことも、待つことも、その延長にある。赦しは、完全に理解できない相手をなお肯定する勇気であり、待つことは、まだ形を取らない理解が芽吹く時間を信じる行為である。受け入れるということは、それらの態度をさらに深く溶かし合わせ、「わからないものも世界の一部である」と認める行為なのだ。

社会はしばしば、「秩序」を守るために不確かなものを排除しようとする。異質な文化や、曖昧な感情、説明のつかない価値観を除外して、整然とした世界をつくろうとする。だが、世界はもともと整ってなどいない。海の潮が満ち引きするように、矛盾と変化のあいだに漂っている。

本当の秩序とは、揺らぎの中で保たれるものだ。風に吹かれた木の葉がしなやかに揺れるように、柔らかさこそが存続を支える。人の理解もまた、完全な一致や同調の中にはない。わずかなズレ、言葉の行き違い、相手の沈黙――そうした裂け目のなかで、ようやく「共に在る」ことが形を持ちはじめ。

均一な正しさを求めるほど、人は他者の存在を見失っていく。多様さとは、他者

の中に宿る未知の部分の部分を許すことにほかならない。受け入れるというのは、世界の不均衡をそのままの形で抱き取ることなのだ。

昔、ある医師が末期の少女に「もう治療をやめよう」と告げたという。家族は涙を流し、怒り、医師を責めた。しかし少女だけが静かに言った。「わたしは生きてるから、死ぬことも生きるうちだね」と。医師は息を呑んだという。彼女の言葉には、痛みも恐れも含まれていたが、それを越えた透明な受容があった。彼女は「死」を敵としてではなく、自分の中に含まれる自然の一部として見ていた。

受け入れるとは、このように世界を自分の側へ引き寄せるのではなく、むしろ自分を世界の側へ開くことだ。私たちは、出来事を自分の意味で包み込みたいと思う。だが、世界は人の理解に先立って存在している。私たちが生きているということとは、すでに「受け取っている」ということだ。呼吸をすること、光を感じることに、他者の声を聞くこと——それらはすべて、世界との関係の証である。

理解を求める衝動は、人間にとって自然なものだ。だが、ときにそれは暴力にもなる。誰かの悲しみを「わかる」と言ってしまふとき、そこには無意識の支配がある。「理解した」という言葉の裏には、相手を自分の世界に取り込んだ安心が潜む。けれど、本当に他者を理解するとは、相手の中に“わからない部分”を残したまま、その存在を尊重することではないだろうか。

ある心理学者は、「理解とは、相手の沈黙に居合わせ続けることである」と述べている。説明できない沈黙の時間にこそ、関係の本質が宿る。沈黙を埋めることなく、ただそこに立ち会う——それが受け入れの始まりだ。

かつて哲学者のルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインは、「語りえぬものについては沈黙しなければならない」と言った。その言葉は、ただの論理的限界ではなく、世界への畏れの告白でもある。私たちは、言葉で完全に捕らえることのできない現実と共に生きている。光、風、死、時間——それらは沈黙の中で語っている。受け入れるとは、その沈黙を聴くことであり、自分の言葉の届かない場所に謙虚であることなのだ。

この「聴く」という態度は、芸術や自然との関わりにも通じている。たとえば、古い絵画の修復に携わる人々は、絵具のひび割れや筆の跡に「作者の時間」を感じ取り、むやみに手を入れない。そこにある“経年の沈黙”を尊ぶことが、真の修復につながるからだ。自然もまた同じだ。風に削られた岩や、枯れかけた花には、崩れゆくものの美がある。受け入れるとは、そうした変化の中に息づく秩序を感じ取ることでもある。

この世界には、制御できないことが多い。天候、他者の感情、偶然、老い、死――私たちは、これらを完全に操作することはできない。それでも現代社会は、「すべてを管理できる」と錯覚している。情報、健康、時間、感情――あらゆるものがアプリケーションによって「測られ」「調整」される時代。だが、制御しきれないものに対してこそ、人は最も深く学ぶのではないか。嵐を止めることはできなくても、風の音を聴くことはできる。病を治せなくても、誰かの手を握ることはできる。そこにこそ、人間の知恵の原点がある。

制御ではなく、共存へ。理解ではなく、受容へ。私たちが今、世界に対して回復しなければならぬのは、この「受け入れる感性」である。

芸術もまた、受け入れの行為である。創作とは、自分の中にある「わからないもの」を形にすることだからだ。ある音楽家は言った。「作曲は、旋律をつくることではなく、聞こえてくる音に手を伸ばすことだ」と。芸術家は何かを“発明”しているのではない。世界にすでに流れている気配に耳を澄ませ、それを媒介している。

創造とは、世界から受け取ることの別名なのだ。絵画も詩も舞踊も、すべて「受け入れ」の所作から生まれている。世界の断片が身体を流れて流れ出る。その瞬間、人は「世界とひとつになる」という体験に触れる。

他者を受け入れることは、その中でも最も難しい。相手を完全に理解できるといふ幻想を手放さなければならぬからだ。人間関係における苦しみの多くは、「わかってももらえない」という嘆きと、「わかってほしい」という無関心のあいだに生まれる。けれど、受け入れるとは、理解を押しつけることでも、無関心でいることでもない。

たとえば、誰かが悲しみに沈んでいるとき、「元氣を出して」と声をかけるのは、相手を思いやるつもりでありながら、同時に自分の不安を和らげる言葉でもある。本当に相手を受け入れるというのは、その沈黙に付き添いながら、相手の時間を信じることだ。「悲しいままでいい」と、心のどこかでつぶやける余白を持つこと。それが成熟した理解であり、人と人の間を支える静かな強さである。

受け入れるということは、やさしさであり、同時に覚悟でもある。他者の痛みを理解できなくても、その痛みの存在を否定しないこと。自分の過去を完全に赦せなくても、それを抱えたまま前へ進むこと。世界を変えるより先に、世界と共にあることを選ぶ――そこに、真の自由がある。

やがて、私たちは誰もが、理解を超えた出来事と出会う。喪失、老い、別れ、そして死。それらを拒まずに迎え入れるとき、人生は初めて「全体」として輝きを帯びるのかもしれない。受け入れるとは、世界と対立することをやめ、世界そのものの呼吸を聴くこと。そのとき、忘却も、記憶も、赦しも、待つことも、すべてがひとつの静かな円を描く。

理解を超えた理解の、その先へ――そこに、もう言葉はいらない。ただ、風の音とともに、世界が静かに息づいている。

設問

問一（60字程度）

本文において筆者が「受け入れる」と述べる態度は、単なる諦めや受動とは異なる。その理由を簡潔に述べよ。

問二（80字程度）

筆者は「排除による秩序」と「揺らぎを抱えた秩序」とを対比している。筆者の考える本当の秩序とはどのようなものか、説明せよ。

問三（80字程度）

筆者は、理解しようとする人間の態度に潜む「暴力」について言及している。その「暴力」とはどのような構造を指すか、具体的に述べよ。

問四（100字程度）

本文において、筆者は芸術や自然の例を挙げながら「受け入れること」の意味を掘り下げている。これらの例に共通する本質的な姿勢を説明せよ。

問五（140字程度）

筆者の主張をふまえ、「他者を受け入れる」とはどのような行為であり、それがなぜ難しいのか、あなた自身の考えも交えて答えよ。

問六（180字程度）

筆者が本文の結末で示す「理解を超えた理解」とは何を意味しているか。本文全体の構成をふまえ、他のキーワード（忘却・記憶・赦し・待つこと）との関係にも触れて説明せよ。

【解答・解説】

問一

模範解答

受け入れるとは、理解を諦めることではなく、理解の限界を引き受けながらも世界とともにあり続けるという、能動的な肯定の姿勢を指している。

別解例一

世界を支配しようとして、制御できないものと共存することで、より深く関わろうとする積極的な態度を「受け入れる」と述べている。

別解例二

理解できない現実を拒まず、わからなさの中に留まる勇気をもって世界を信じ続けることが、「受け入れる」という行為の核心である。

自己採点チェック

- ・ 「受け入れる」理解を放棄ではない」と明言したか。
- ・ 「能動的／肯定的／共存」など本文の価値観に合う語を用いたか。
- ・ 単なる感情論でなく「姿勢」としてまとめられているか。

問二

模範解答

筆者は、秩序とは均一性によって保たれるのではなく、矛盾や揺らぎを内包しながら動的に維持されるものだと考えている。その柔軟さこそが世界を支える本質的な安定である。

別解例一

「整えるための排除」ではなく、「異質なものを含んでなお成り立つ」状態が真の秩序であると筆者は説く。安定とは静止ではなく、関係の中でゆらぐ均衡だと示している。

別解例二

筆者にとっての秩序は、完全に整うものではなく、矛盾や多様さを抱えたまま共存する動的平衡である。硬直ではなく、生命的な揺れを含んだ安定を価値としている。

自己採点チェック

- ・ 「排除的秩序」と「揺らぎの秩序」を対比して説明できたか。
- ・ 「動的」「共存」「柔軟」「生命的」など本文に即した表現を用いたか。
- ・ 「秩序Ⅱ完全な静止ではない」という観点を明記したか。

問三

模範解答

筆者は、理解しようとすることが他者を自分の枠に閉じ込める行為になりうると指摘している。相手を「わかった」と断ずることは、相手の沈黙や未知を奪い、関係を支配する形の暴力である。

別解例Ⅰ

人を理解するという名のもとに、相手のわからなさを自分の安心の中に取り込むことがある。筆者はこの「理解の暴力」を、他者を自分の尺度に従わせる行為として問題化している。

別解例Ⅱ

「理解する」ことが、しばしば相手の複雑さを削ぎ落とし、自分の納得の形に変えてしまう——この瞬間、理解は支配へと転じる。筆者はそこに、沈黙を聴かぬ傲慢が潜むと述べている。

自己採点チェック

- ・ 「理解の暴力」が何を奪うか（相手の沈黙・未知）を明記したか。
- ・ 「支配」「安心」「尺度」など、心理構造を具体語で書いているか。
- ・ 単なる道徳批判でなく、「構造的暴力」としてまとめたか。

問四

模範解答

芸術家や自然に対して筆者が見出す共通点は、「介入せず、そこにすでにあるものに耳を澄ませる」姿勢である。絵画の修復や風化した岩の例のように、変化や沈黙を尊び、制御よりも調和を選ぶ態度が受け入れの核心だと示している。

別解例1

筆者は、創作や自然観察の根底にあるのは「聞く」ことであると述べる。人は世界を作り変えるのではなく、もともと流れているものを媒介する存在だ。変化や劣化を否定せず受けとめる姿勢が、受け入れの本質を体现している。

別解例2

芸術も自然も、人の意志を超えたリズムを持つ。筆者は、そのリズムに身を委ね、整えようとし不在り方にこそ「受け入れる」という知恵が宿ると説く。完成ではなく、共に変わり続けることが価値なのだ。

自己採点チェック

- ・ 「芸術と自然の共通点」耳を澄ませる／変化を尊ぶ」を明確に書いたか。
- ・ 「制御より調和」「作るより聴く」などの対比表現を活かしたか。
- ・ 具体例（修復・風化など）を一語でも触れたか。

問五

模範解答

他者を受け入れるとは、理解できない部分を排除せず、その沈黙に居合わせ続けることである。相手を自分の尺度に合わせてようとせず、相手の時間を信じる行為だ。だが、それは同時に不安を伴う。自分の思い通りにできない他者と共にあるには、信頼と勇気が要る。受け入れるとは、関係の主導権を手放す覚悟でもある。

別解例1

他者の痛みや沈黙を理解しきれないまま尊重すること、それが受け入れるという行為だ。人は「わかることで安心したい」という欲求をもつが、その欲求を超えて相

手の存在をそのまま認めるには、強さと忍耐が必要だ。理解よりも信頼に重きを置く点に、筆者の思想の核心がある。

別解例②

他者を受け入れるとは、相手を変えるのでも、距離を取るのでもなく、相手の中の「わからなさ」を自分の中にも棲まわせることだ。そこには不確かさへの耐性が必要であり、それゆえ困難だが、同時にそれが関係を長く支える土台となる。受け入れは、他者との共存の技でもある。

自己採点チェック

- ・ 「他者を自分の尺度に合わせない」点を明示したか。
- ・ 「信頼」「不安」「覚悟」「忍耐」などの心理語を盛り込めたか。
- ・ 「受け入れ⇨関係の維持／共存の技」として整理できているか。

問六

模範解答

筆者の言う「理解を超えた理解」とは、知的把握を超えて、世界と一体化する感受の状態を指す。忘却・記憶・赦し・待つことといったテーマはすべて、「制御できないものを抱えながら生きる力」として統合されている。受け入れるとは、理解できない世界を排除せず、その呼吸に耳を澄ます行為である。人はそのとき、個としての境界を越え、世界そのものの中に溶け込む。筆者はそこに、人間の成熟の最終形を見ている。

別解例①

「理解を超えた理解」とは、わからないものを拒まず、その存在を信じ続ける態度である。忘却は執着をほどこき、記憶はつながりを保ち、赦しは他者を解き放ち、待つことは時間を信じる。これらすべてが、受け入れるという行為に収束する。筆者は、理解とは説明ではなく共鳴であり、世界と調和して生きる知恵のだと示している。

別解例②

筆者は、人間が最後に至るのは「知る」ことではなく、「共に在る」ことだとする。理解を超えた理解とは、わからないまま世界と呼吸を合わせる生の感覚であり、忘却・記憶・赦し・待つことを通じて形づくられる心の成熟である。理解の終着点は沈黙の中の共存であり、そこに人は初めて安らぎを得る。筆者の思想は、知ではなく関係としての理解に到達している。

自己採点チェック

- ・ 「理解を超えた理解」の意味（知的把握↓共存／感受）を述べたか。
- ・ 「忘却・記憶・赦し・待つこと」との関連に必ず触れたか。
- ・ 「共鳴」「呼吸」「世界と一体」「成熟」といった語群を含め、思想的にまとめられているか。

◆全体総括

この文章は、人が「理解できないもの」とどのように向き合うかを問う、思想的な随筆である。筆者は、「理解することの限界を見据えながら、その先にある「受け入れる」という態度を、最も能動的な人間の知恵として描いている。

本稿における「受け入れる」は、諦めや無抵抗の受動ではなく、**自分を世界の側へ開く行為**である。理解とは世界を自分の中に取り込む営みだが、受け入れるとはその逆に、**世界の中に自分を置き直す態度**だ。筆者は、人間が本当に成熟するとき、それは世界を「変える」ことではなく、世界と「共に生きる」ことの中にあると説く。

文章は、他者理解・芸術・自然・死といった多層的な場面を経て展開する。そこに共通するのは、制御できないものへの敬意と、沈黙を聴くような感受の姿勢である。

絵画の修復や岩の風化といった比喻を通して、筆者は「変化を否定せず、時間とともに歩む」ことを真の理解と位置づける。それは、知的に世界を把握することで

はなく、世界と呼吸を合わせることにほかならない。

本稿はまた、「忘却・記憶・赦し・待つこと」というこれまでのテーマを統合している。忘却は過去への執着をほどこき、記憶はつながりを保ち、赦しは他者を解き放ち、待つことは時間を信じる――これらすべてが「受け入れる」という行為に収束する。つまり、受け入れるとは、制御できない世界を抱えながら生きる力であり、理解を超えた理解の姿である。

この文章を読むことは、自らの「わからなさ」と向き合うことでもある。人は、わからないものを排除して安心を得ようとする。だが筆者は、その安心の外側にこそ、本当の自由があると示す。「わからないままに共にいる」「沈黙の中で呼吸を聴く」――それは易しいことではない。けれど、その静けさの中でこそ、世界との関係は最も深く、最も人間的なかたちで立ち上がる。

「受け入れること」は、もはや理解を超えた理解であり、存在と存在が響き合う地点にほかならない。人間が学び続けるということは、結局のところ、この“境界を越える理解”への道を歩むことなのだ。

おわりに

ここまでお疲れ様でした！ 今回はすべて記述式の問題としました。できるかできないかに関わらず、皆さんが自分自身の言葉で解答を作成することが大事ですし、それがそのまま国語の実力を高めることにも繋がります。第五問にもありましたが、分からないままに理解する、分からないままに取り組むことで、分からないけれども何かが育つこともよくあります。

記述式問題について、自己採点のやり方に触れておきましょう。

もちろん自分なりのやり方でよいのですが、自分で書いた答えと模範解答とされるものを見比べて、どこが同じで、どこが似ていて、どこが違って、どこが抜けているのかなどを確認します。そのうえで、自分の書いた趣旨が解答例とされるものと同じ内容を指していると思えるならば、丸をつけてしまってもよいでしょう。反対に、解答例と同じ単語を使っているけれども、答えと趣旨が違ってしまう場合もあるでしょう。そういうときには、どこをどのように変えれば解答例の趣旨と近づくか、そもそも本文の理解がうまくいかなかったのかなど、ぜひいろいろと検討してみてください。

正解と同じものを書くことが目標ではなく、右のような自己採点をすること自体が実力を磨きますよ。

それでは、また次の教材でお会いしましょう！